様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月　 ７ 日現在

機関番号：５６１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２６０

研究課題名（和文）高橋虫麻呂の語りの方法―萬葉和歌史における伝説歌の意義―

研究課題名（英文）Takahashi Mushimaro's retelling method - The significance of existence of Densetsuka in Manyoshu

研究代表者
錦織　浩文（Nishikori, Hirofumji）

阿南工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：１０３３２０６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高橋虫麻呂の伝説歌の特性のいくつかを明らかにした。一つは、うたい手の設定である。虫麻呂は、歌の中でうたい手を設定し、批評を加えながら過去の出来事を再現している。ここに、他の歌には見られない虫麻呂伝説歌の特徴がある。次に、改変である。虫麻呂は、伝説そのままを再現するのではなく、意図的な改変を加えている。この点、虫麻呂の方法とラフカディオ・ハーンの再話の方法はよく似ている。本研究はこれについても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study reveals several distinctive features in the folktale type of Japanese poetry by Takahashi Mushimaro. The first feature is the way how Mushimaro establishes the narrator of the poet. He retells the events in the past while engaging in criticism of the original. This feature is unique to Mushimaro's poetry, which is not seen in the works of other poets. Another characteristic is the way how Mushimaro modifies the original. He doesn't just reproduce the content of the folktale as it was, but changes the contents intentionally. In this point, Mushimaro's retelling method is quite similar to the way Lafcadio Hearn retells old tales of Japan in his work. The current study also clarifies the similarity between those two authors.

研究分野：萬葉集研究

キーワード：日本文学　古代文学　萬葉集　高橋虫麻呂　伝説歌　ラフカディオ・ハーン　再話文学

１．研究開始当初の背景

(1) 萬葉歌人高橋虫麻呂の歌の中で、過去の人物にまつわる出来事を題材とする歌のことを一般に「伝説歌」と呼んでいる。次の四首がそれに当たる。

Ａ真間娘子歌（巻九・1807～8 番歌）
Ｂ菟原処女歌（巻九・1809～11 番歌）
Ｃ浦島子歌（巻九・1740～1 番歌）
Ｄ珠名娘子歌（巻九・1738～9 番歌）

過去の出来事をうたう歌は、『萬葉集』中、他にもあるが、虫麻呂の歌がとくに「伝説歌」と呼ばれて区別されているのは、一言でいえば、歌の中で過去の出来事の内容を詳しく再現していることによると考えられる。それは虫麻呂の伝説歌の一面を確かに正しく捉えている。が、虫麻呂の伝説歌と他の過去の出来事をうたう歌との間には、他にもいくつかの相違がある。その相違は、しかし、従来あまり明確にされることはなかった。そうした中にあって、注目される論稿がある。

(2) たとえば、虫麻呂の浦島子歌では、長歌の中で過去の出来事を再現しながら、「老いもせず死にもせずして　長き代にありけるものを　世間の愚か人の」というようにうたい手の考えを入れている。これについて鈴木日出男「『竹取物語』の異郷と現実―語りの眼―」（国語通信第 248 号・1982 年）は、後の物語の語り手の評言、いわゆる草子地に近い叙述とし、作中人物を相対化し、人間の心の深奥の何であるかを想像させている、とし、虫麻呂の伝説歌が他の歌から一歩進み出たところにあることを指摘する。

(3) また、多田一臣「水江浦島子を詠める歌」（『伝承の万葉集　高岡市万葉歴史館論集 2』笠間書院・1999 年）は、「人麻呂は叙事を拡大するとともに、古代歌謡以来の比喩を方法化して取り込むことで、長歌の表現を究極まで高めた。が、長歌の基本はあくまでも叙事にあるから、叙事を長大化する以外にその表現の展開は望めない。人麻呂によって完成されたと同時に長歌が衰退に向かうのは、そこに理由がある。しかし、そうした長歌に散文の論理を導入し、あらたな批評性を付与することで、表現の限界を打ち破ろうとした歌人も現れた」とし、長歌における表現の可能性を極限まで追求した歌人として山上憶良と高橋虫麻呂をあげる。

(4) 実際、虫麻呂の伝説歌には様々な意匠が施されており、それまでの長歌とは別種の趣がある。とくに、うたい手が叙事に介入し評言を挿入することで人間の本質に迫ろうとする方法は、歌の奥行きをもたらして、従来の長歌の限界を破る試みであったといえる。たしかに虫麻呂は、それまでの長歌とは異なるところを目指した歌人の一人として評価されてよい。本研究は、こうした研究を背景として、虫麻呂伝説歌の語りの方法と萬葉和歌史における意義を考察し、虫麻呂の伝説歌の価値を確認しようとしたものである。

２．研究の目的

(1) 本研究目的の第一は「うたい手の導入、評言の挿入の用法の由来と独自性を明らかにすること」とした。うたい手の導入は、浦島子歌において顕著である。その長歌は、「春の日の霞める時に　住吉の岸に出で居て釣り舟のとをらふ見れば　いにしへのことぞ思ほゆる　…　ゆなゆなは息さへ絶えて後つひに命死にける　水江の浦島子が家ところ見ゆ」というように、うたい手の位置を示し、浦島子の「家ところ」を見納めるという枠組みをもつ。「額縁的構図」とも呼ぶべきこうした叙述の方法は、『萬葉集』中、他の歌には見られない。さらに、浦島伝説歌では、過去の出来事を再現する中に「老いもせず死にもせずして　長き代にありけるものを　世間の愚か人の」というように、うたい手の評言を入れている。本研究では、こうしたうたい手の導入、評言を入れる方法の由来と浦島子歌と他の歌との違いを明らかにしようとした。

(2) 目的の第二は「過去の出来事を再現する際の意図的な改変部分を明らかにすること」とした。虫麻呂の伝説歌は、全般にわたり、物語の重要な場面で改変が加えられていると見られる。たとえば、萬葉の時代、浦島子にまつわる話は『日本書紀』、逸文『丹後国風土記』に見えるけれども、虫麻呂の浦島子歌では伝説の舞台が住吉となっており、亀が登場しないなど、『日本書紀』『風土記』と虫麻呂歌との間には種々異なるところがある。浦島子が玉櫛笥を開ける理由もその一つ。『風土記』では、浦島子が玉櫛笥を開けるのは、「郷里を廻れど一親にすら会はず、既に旬月を経ぬ。すなはち玉匣を撫で神女をめでつ。ここに島子、前日の期を忘れにはかに玉匣を開きあけつ」というように、神女を恋しく思うあまりのこととするが、虫麻呂歌では、「この箱を開きてみてば　もとのごと家はあらむ」という理由による。これは元の伝承

にあったものではなく、虫麻呂の意図的な改変による部分と見るべきである。本研究では、伝説歌において虫麻呂が改変した箇所を確認し、それらの改変と歌の主題との関連性を明らかにしようとした。

(3) 目的の第三は、「虫麻呂の伝説歌とラフカディオ・ハーンの再話との比較研究をおこない、相似点を明らかにすること」とした。周知のとおり、ハーンは、日本の昔話を取り上げ、自らの感性を加えつつ英訳している。ハーン研究では、それを「再話」と呼んでいる。ハーンの再話の方法は、伝説歌における虫麻呂の方法とよく似ている。とくに、ハーン来日第二作『東の国から』の巻頭を飾る随筆「夏の日の夢」は、紀行文の中で浦島伝説を再現する形をとるが、全体的に虫麻呂の歌から大きく影響を受けていると見られる。本研究では、虫麻呂の伝説歌とハーンの作品との比較をおこない、「再話文学の系譜」と呼ぶべきつながりが見て取れることを明らかにしようとした。

３．研究の方法

(1) 本研究は、研究代表者一人で取り組んだ。本研究は、文学研究であるので、当然のことながら、文献調査、実地調査をおこない、考えることが、研究計画・方法の基盤となる。『萬葉集』をはじめとして、『古事記』『日本書紀』『風土記』『続日本紀』など、取り上げる文献を熟読することはもちろんのこと、上代日本文学研究の他、平安物語文学研究、物語論（narratology）などの研究領域の成果を調査し、必要に応じて取り入れていくことをおこなった。

(2) 具体的には、まず『萬葉集』を研究対象の中心に置き、「うたい手の導入、評言の挿入」「意図的な改変」の観点によりながら、『萬葉集』の中における虫麻呂伝説歌の特性を考察することから始めた。そして、考察を進める中で得られた研究成果を、上代文学に関する研究会等において、その都度、口頭発表、及び論文の形で公表していった。

(3) 併せて、ラフカディオ・ハーンの再話作品を読み込み、原話とは異なる、ハーンの意図的な改変箇所を把握し、虫麻呂伝説歌との比較をおこなった。その研究成果を、ハーンに関する研究会において論文の形で発表した。

４．研究成果

(1) 研究成果の第一は、うたい手の導入、評言の挿入の観点から、虫麻呂伝説歌の特性の一面を明らかにしたことにある。本研究ではとくに浦島子歌を取り上げ、これについての考察を中心におこなった。浦島子歌においては、長歌の冒頭と末尾にうたい手を登場させる「額縁的構造」と呼ぶべき叙述の方法を採用し、死者に対して批判的言辞を投げかけることを可能にしたという点で新しさが認められる。これによって当該歌は従来の挽歌から離陸し、伝説歌と称すべき領域の高みに達したということができるであろう。こうして長歌の中で伝説を再現するという虫麻呂の試みは、浦島伝説歌において完全に達成されたと考えられる。本研究の成果はまずこのことを明らかにしたことにある。

(2) 研究成果の第二は、伝説歌における意図的な改変箇所を明らかにしたことにある。虫麻呂の東国関係歌は、おしなべて都人の視点によって捉えられ、都人の興味関心を引き寄せるように誇張してうたわれていると理解される。その目で見ると、東国の伝説上の女性をうたった珠名娘子歌、真間娘子歌においても、都人の関心を刺激するように、娘子の衣装（「胸わけの広き我妹」）、行動（「夜中にも出でてぞ逢ひける」）、髪（「髪だにも掻きは梳らず」）、素足（「沓をだに履かず行けども」）、生業（「立ち平し水汲ましけむ」）などといった様子が、いかにも東国的に造型されていることが知られる。従来の研究でもこうした点に触れるものはあったが、本研究では歌の解釈について新見を示しつつ上記のことを明確に示した。

(3) 研究成果の第三は、伝説を再現する際の意図的な改変という問題にかかわって、虫麻呂の伝説歌とラフカディオ・ハーンの再話作品との相似性について考察したことにある。ハーンの随筆「夏の日の夢」は、紀行文の中で浦島伝説を再現する形をとる。ハーンが再現した浦島伝説は、ハーン独自の感性よって改変された箇所をもち、原話とは異なるものとなっている。その改変の方法は、虫麻呂の方法とよく似ている。ハーンは虫麻呂歌の愛好家であったことが知られているが、ハーンは虫麻呂歌の再話の方法から刺激を受けていたのではないかと考えられる。本研究の成果の一つとして、虫麻呂歌とハーンの作品との比較をおこない、「再話文学」に関する一つの系譜を明らかにしたことが挙げられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①錦織浩文、高橋虫麻呂の東国関係歌―東国的造型について―、文学・語学、全国大学国語国文学会、査読有、第 212 号、2015、pp.85-98

②錦織浩文、高橋虫麻呂浦島伝説歌とラフカディオ・ハーン「夏の日の夢」(1)、へるん、八雲会、査読有、第 51 号、2014、pp.26-28

③錦織浩文、浦島伝説歌におけるうたい手の設定、萬葉語文研究、萬葉語学文学研究会、査読有、第９集、2013、pp.141-160

〔学会発表〕（計１件）
①錦織浩文、浦島伝説歌の形成と人麻呂歌―高橋虫麻呂の語りの方法―、第 37 回萬葉語学文学研究会、2012 年９月 30 日、武庫川女子大学（兵庫県・西宮市）

〔図書〕（計０件）
なし

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
なし

○取得状況（計０件）
なし

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
錦織浩文（NISHIKORO, Hirofumi）
阿南工業高等専門学校・創造技術工学科・教授
研究者番号：10332066

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし